桓武平氏正盛流系図補輯之籾殻

佐々木　紀一

始めに

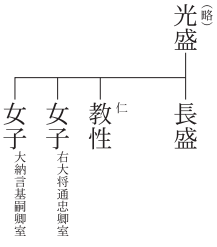
筆者はこれまで古系図と古記録より、平家一門の伝記を考証し、平家系図の成立について検討して来た。[1] 本稿では、それ以降、気付いた史料に基づき、遺漏と新見を纏めた。

一、池光盛の猶子

平家没落後も頼朝の支援を受け、堂上家として残つた池大納言頼盛の嫡子となつたのは、八条院乳母子大納言局腹で「三男」[3] の光盛である。膨大な所領、鎌倉将軍家との縁故からすれば、父の官途を経ても不思議ではないが、散位のまま終はつた。所領は主に女子達に分割され、[4] 重代とも云ふべき名刀抜丸もその嫁ぎ先の久我家に譲渡されてゐる。[5] 男子が存在したのに僧籍に入れ（拙稿④）、堂上公家の池家の名跡を光盛が残さなかつたのは何故か。

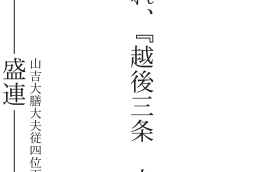
嘗て筆者は主に藤原定家の評から、光盛が相当個性的な人物であることと無関係ではないと推定したが（拙稿④）、光盛が男子を僧籍に入れたとするには不都合な記載を持つ系図がある。既に公刊されるが江戸末期編纂の『系図纂要』を見るに（名著出版の翻刻）、

〈系図一〉『系図纂要』



と長盛なる人物が釣られ、『越後三条　山吉系図』[6] には、

〈系図二〉



と山吉氏の先祖とされるが、脇書の記事、盛連の実在は確認出来ず、史実ではないと考へらる。近世末期編纂の『系図纂要』は後世の仮冒系図を多く載せるから、山吉氏の記事を取り入れたのだらうか。

また中世成立の主要な系図である、

イ、『尊卑分脈』「桓武平氏」[7]

ロ、続群書類従『尊卑分脈脱漏』「平氏」[8]

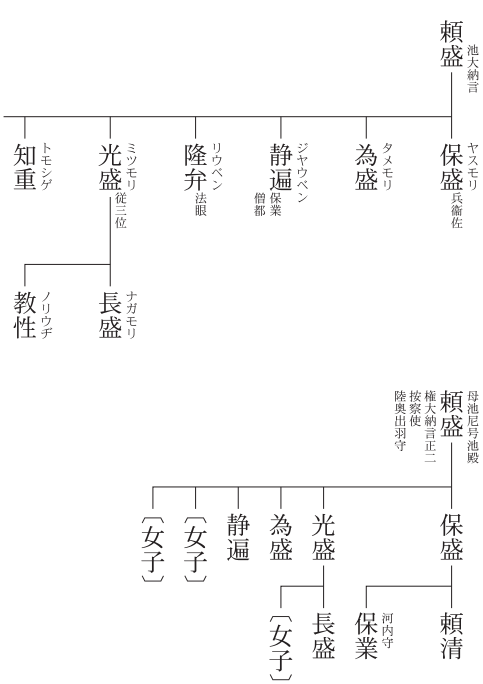
ハ、尊経閣文庫本『帝皇系図』（紙焼写真による）

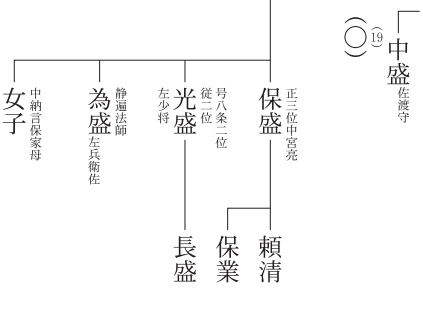
二、東大史料編纂所『古系図集』[9]
ホ、妙本寺本『平家系図』[10]
へ、入来院家所蔵『平氏系図』[11]
ト、『山門文書』所収「山門氏系図」[12]
チ、正宗寺蔵『諸家系図』[13]
リ、『野辺文書』所収各種平氏系図[14]
ヌ、延慶本『平家物語』「平氏系図」[15]
ル、文禄本『平家物語』「平氏系図」[16]

にも同人は見えないのであるが、嘗て拙稿①で評価した板本『源平系図』[17]に、この長盛が吊られる。即ち、

〈系図三〉

板本『源平系図』　『諸家大系図』四「平氏」[18]





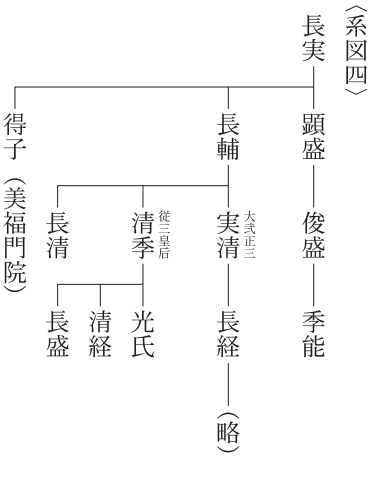
とある。三系図の中、『諸家大系図』四所収系図と指宿本（及び『本朝武家大系図』[20]）とが近く、指宿本の成立時代が不明な現在、長盛を載せる系図は近世初期までしか遡れない事になる。

この光盛子の長盛について、山吉氏の系図作者以外、これまで注意して来なかつたと思はれるが、『大日本史料』五之三、安貞元年六月一日条所引の東京国立博物館蔵『明月記』同日条に次の記事がある。

従三位清季卿自去月癰瘡、廿七日被請見之、更不可存命由示送、今月一日逝去了、本飲水労云々、遂不出家、□□□、心中有所存歟、本自僻案之異人也、叙上階可忿出家由奏聞、勅許、臨最後病猶不□□云々、本妻惟義娘、又皇子祖母之佐尼同心看病、本妻所生安房前司〔光盛卿猶子〕、又大夫等馳走云々[21]

この藤原清季の死亡記事を国書刊行会本では四月十一日条とし、傍線を「女」とするが、問題の光盛猶子安房前司こそ長盛であつた。新訂増補国史大系本『尊卑』「末茂孫」に（略記）、

〈系図四〉



とあり、脇書がないが、[22]『家光卿記』承久三年閏十月十八日条の除目記事に[23]「安房守藤長盛」とあつて、『尊卑』の清季子と符合するからである。長盛の経歴、光盛との関係もこれ以上は不明だが、父祖の実清・清季は美福門院の一族で、その所生の八条院・高松院に仕へた家系であり、[24]八条女院近臣団の間で婚姻、縁戚を結ぶ例が見られる。

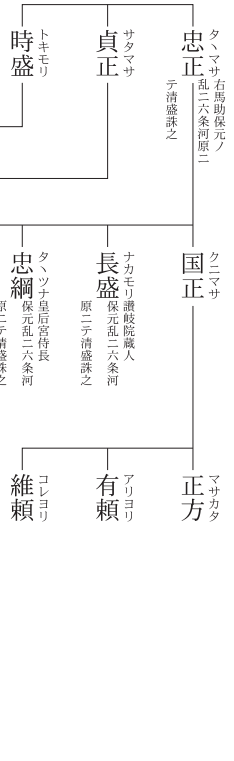
新訂増補国史大系『公卿補任』安貞二年藤原長清条に、「母高階清章女、同長経清季等卿」とあるが、この清章女（実清室）愷子は、「元八条院女房、号丹波」[25]であり、清章自身、美福門院院司である。[26]藤原定家も母の美福門院加賀であり、[27]兄弟共々八条院に近侍するが、[28]妻は美福門院の外戚藤原季能の女で、また平保盛子保教を幼少より養育してゐた。[29]

光盛が清季子を猶子としたのも共に八条院近臣の縁に依るものであらう。板本『源平系図』他が吊る長盛はこの人物で、山吉氏は系図のこの人物を借りたと見て良い。光盛は外孫藤原公斉をも猶子にしてゐた事が分かるが、[31]共に池家の継承者ではない。先の推定通り、直系男子を残してゐなかつたとして良い。

二、平時盛伝補

拙稿①では『尊卑』に見えず、板本『源平系図』に正盛子として挙げる貞正・時盛（その子）の記載を評価した。

〈系図五〉（板本『源平系図』）（〇）

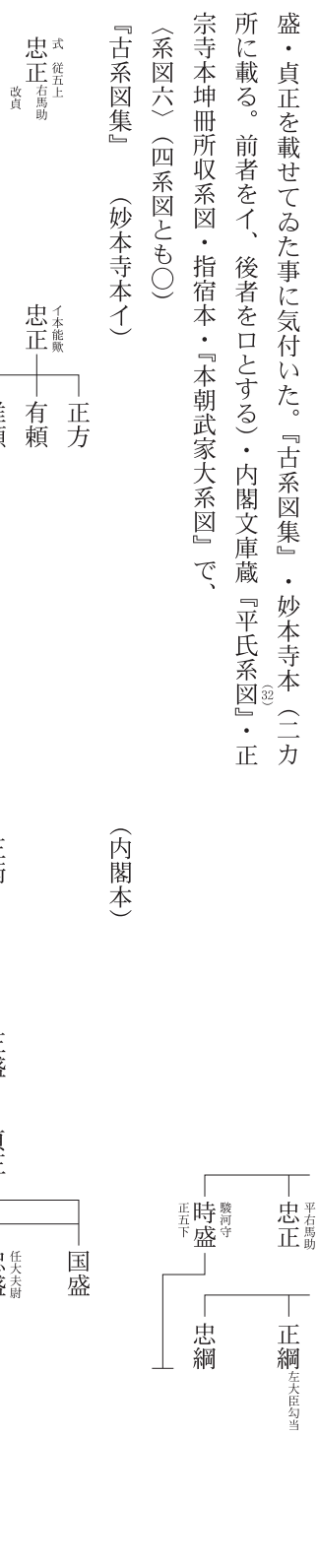


とあるのがそれだが、その後公刊・紹介された前掲の中世系図に時

盛・貞正を載せてゐた事に気付いた。『古系図集』・妙本寺本（二カ所に載る。前者をイ、後者をロとする）・内閣文庫蔵『平氏系図』[32]・正宗寺本坤冊所収系図・指宿本・『本朝武家大系図』で、

〈系図六〉（四系図とも○）

『古系図集』　（妙本寺本イ）



とある。妙本寺本イ・内閣本は本来の形態を崩してをり、前者（及び妙本寺本ロ）で、平大納言時忠を忠正子とする点（正宗寺本坤冊収系図同）、猪熊蔵人盛正なる未確認人物を釣る点等、胡乱な記事がある。特に時盛の脇書「稲荷左大臣」、或はその「家司」（『系図纂要』）、また「稲荷左京大夫」（正宗寺本坤冊所収系図）としても、当該する大臣・任官の見当が付かない。[33] 対して『古系図集』の忠正・時盛[34]の脇書は基本的に正しい（貞正の「伊賀守」は伊勢守の誤り）。時盛は『玉葉』治承二年十二月十五日（立太子）にも、

　　蔵人　（中略）時盛子（平家也）

とあり、青木淳氏が紹介した『遣迎院阿弥陀如来像像内納入品資料』の源平両家の交名を抜けば、

平経盛　同忠度　同有盛　同行盛　同基盛
同経正　同通盛　同惟盛　同資盛　同清経　（一人略）平教経
同宗盛　同重盛　同重衡　同知盛　同時盛　平時忠

と時盛が見えるから、平家一門として良く、系図の通り、清盛叔父として良い。官途からすると時盛は、清盛子弟の栄達には与からず、下級官人の道を歩んでゐたと考へられる。

三、上杉本『平家けいつ』について

そこで更に他系図に見えなかつた貞正・時盛の子の記載がある板本『源平系図』の成立事情が問はれる。拙稿①ではその成立時期が版行以前に遡るかと推定しただけだが、[36] 上杉本『平家けいつ』から、その成立事情を幾らかなりと窺ふ事が出来ると思はれる。

同系図は現在、上杉博物館蔵で上杉文書に含まれる。既に雄松堂刊行のマイクロフイルム「上杉文書」に収録され、公刊されてゐる。折本一冊（請求記号上杉一六三四）竪二九・四糎、横一八・六糎、朽葉色表紙、左上に朱紙に金泥で流水草木を描く題簽が貼られ、そこに「平家けいつ」と墨書。本紙は楮紙か（角谷由美子氏御示教。本書の閲覧に御便宜を図つて頂いた）。表十面が墨付で（裏面には記載なし）、本文一筆。一面四～七段に人物名を記す。系線は朱筆。室町末期の写しと思はれるが、それ以前の伝来は不明。人名・官位に読仮名が振られ、[37] 後掲する様に、「ヨウ」音が「ユウ」音に転訛する特徴がある。

本書の構成は桓武天皇より始まり、①堂上平氏（知信流）、②良兼流（梶原）、③北条（泰時流、時房流）、④正盛流、⑤坂東平氏部（良文流）として、i忠頼流（ア忠常流〔千葉・上総介〕、イ将常流〔河越・畠山・小山田〕、ウ頼尊流〔土肥〕）、ii為通流（三浦・和田）、iii景村流（大庭）、iv景道流（長江）に大きく分かれるが、④以外は他系図に比して、収載人物・脇書が少ない。

本系図の記載方法として、世代を上段から下段に竪方向に下ろすのでは無く、同一段に右から左に並べる傾向が強い。為に親子・兄弟関係を誤つて繋ぐ例がある。例へば維盛子として資経が六代・夜叉御前の次に釣られるが、これは次の正宗寺本を見るに、長崎氏の祖として資盛（維盛弟）子に釣られる資綱を誤り接続したものであらう。

〈系図七〉（正宗寺本）（〇）

その他に上杉本には未確認の家系・人物が掲載される。①堂上平氏で、時忠二男の時家流として、

〈系図八〉（上杉本）

時家（ときいへ）――時朝（ときとも）――時世（ときよを）――時清（きよ）――時貞（さた）――時藤（ふぢ）

従四位

とあり、②の正盛流の経正流として、

経政（つねまさ）（くわうごくうノすけ）（たちまノかミ）――経安（つねやす）――経春（つねはる）

とあり、同じく基盛子に、

基盛（もとモり）（あきノかミ）――行盛（ゆきもり）（左馬頭）――行兼（ゆきかね）（従三位）

祐円慶受房

とあるが、行兼は『公卿補任』からして存在しないが、全て史料に確認出来ない家系である。[38] 清盛女子に「五条大納言国綱卿御台（ハごちうたいなごんくにつなきやうみたい）」とあるのも面妖。祐円、また②の能円をそれぞれ基盛、教盛の子とする点は、『平家』登場人物を系譜に当て嵌めたもので、[39] 総じて歴史史料としては内容が劣る事になる。

また清盛に至る桓武平氏の系図について上杉本は、次の様にある。

〈系図九〉（上杉本）（〇）

- 高見親王（たかみ）
- 高望親王（たかもち）（じゆ五る下かづさノかミ）（くハんへい二年五月二日ニ）（はしめてたいらのうちヲ）（たまハる）
- 望視（もちちか）
- 良望（よしもち）（ちんしゆふしやうぐん）（くにか）（ひたちの大しやう国香也）
  - 直方（なおかた）（じう）（従五位下）
    - 良将（よしまさ）――将門（まさかど）（ちんしゆふしやうぐん）（へいしんわうとかうす）（さうまノ小二良）
      - 良兼（よしかね）（むつノかミじゆう四ゐる下）（かちはら先ぞ）
      - 維将（これまさ）（かづさノすけ）

とあるが、維衡・正度・正盛に至るまで、官位が左右に二種記されてをり、傍線は古記録や他の中世系図に一致するが、波線は未確認か、或は不当に高い。これは真名本『曾我』巻一の平氏系譜に一致する。

其子、鎮守府将軍良望、舎兄失二下シ常陸守望視朝臣一、入二替其跡一、改二常陸大拯国香一、其子貞盛将軍、其子、従二位権少将維衡、其子四位少納言政慶、其子従三位政衡、其子播磨守政盛[40]

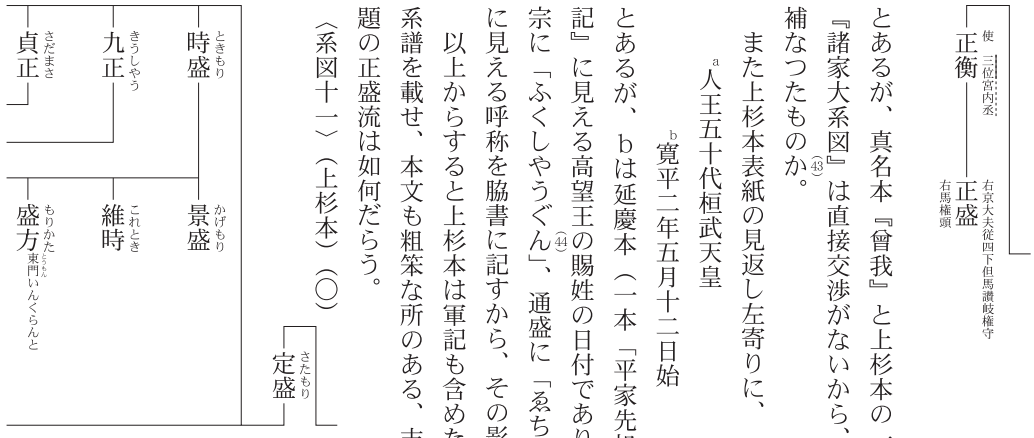
で、「望視」なる未確認人物を掲載するのは真名本の中、妙本寺本であり（大永八年本は「望親」）、訓読本ではない。[41] 真名本『曾我』を利用して系図を作成したのが『百姓縁起』であるが、[42] それとも一致しない。また一部同じ官位の脇書を持つのが『諸家大系図』四で、

〈系図十〉（『諸家大系図』四）

- 良文（よしふミ）（ちん）（略）
  - 貞盛（さたもり）（むつノかミ）（ちんしゆふしやうぐん）（ぶせんぞ）（しゆふしやうぐん）（むらおか）（五良大夫）
    - 維時（これとき）（略）
    - 維衡（これひら）（ひたちノかミ）（じう二）（ゐごんノぜう）（略）
      - 政度（まさのり）（ゑちせんノかミ）（じう四ゐる）（下せうなごん）
      - 政衡（まさひら）（くない）（ぜう）（従三ゐ）
      - 政盛（もりはる）（まノかミ）（あらためてさ）（ぬきノかミといふ）

（〈系図十一に続く〉）

維衡（従四下権少将）――正度（使 正五位下少納言越後守武蔵守）（上総介帯刀）



とあるが、真名本『曾我』と上杉本の一致度には及ばない。上杉本と『諸家大系図』は直接交渉がないから、上杉本は真名本『曾我』より補なつたものか。[43]

また上杉本表紙の見返し左寄りに、

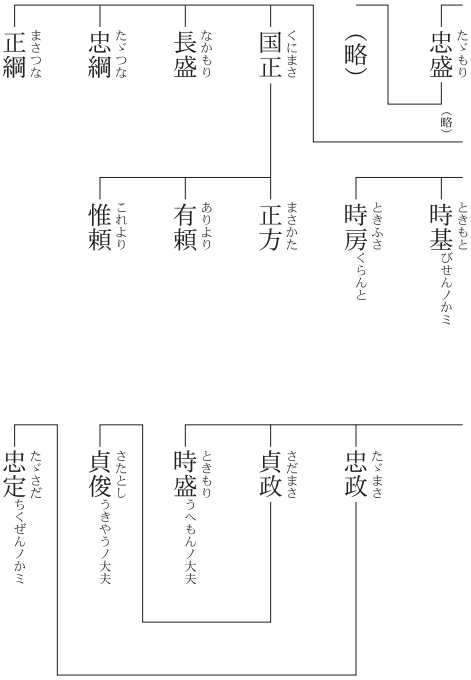
a 人王五十代桓武天皇

b 寛平二年五月十二日始

とあるが、bは延慶本（一本「平家先祖之事」）・長門本・『源平盛衰記』に見える高望王の賜姓の日付であり、本文では官位ではなく、能宗に「ふくしやうぐん」[44]、通盛に「ゑちせんノ三ゐ」とあり、『平家』に見える呼称を脇書に記すから、その影響を受けると思はれる。

以上からすると上杉本は軍記も含めた複数の史料を利用し、雑多な系譜を載せ、本文も粗笨な所のある、末流系図であると云へるが、問題の正盛流は如何だらう。

〈系図十一〉（上杉本）（〇）



板本『源平系図』と時盛・貞正・国正の各流を持つ点で一致するが、忠正（「九正」は「忠正」の忠字を誤つたもの）・時盛・貞正を重出する点は此処でも本系図が複数系図の合成である事を窺はせる。前述した通り、忠貞は忠正の改名であるから、これを親子とする点は誤りで（又正盛を定盛と誤る）、延慶本系図の忠正に「右京大夫」とある点、貞俊と忠定の脇書は目移りの誤写であると思はれる。[45] 盛方の脇書は上西門院が正しいが（拙稿①）、板本の「上東門院」を誤つたものであるから、上杉本は端的に板本『源平系図』の如き記事取り入れ、崩しただけだらうか。

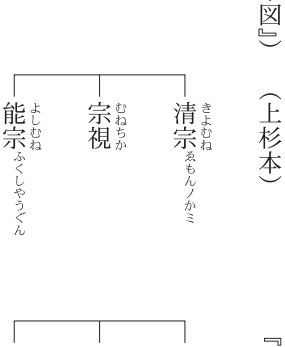
しかし板本『源平系図』に見えない、❶時盛の「うえもんノ大夫」（前述）、❷時基の「びせんノかミ」[46]、❸時房の「くらんと」[47]、❹貞俊の「ちくぜんノかミ」[48]の官途は古記録に確認出来る。延慶本『平家』四「平家一類百八十余人解官セラル、事」所収の寿永二年の解官人の交名に

一致するのは❷及び景盛[49]で、❸は官職、❹は実名が異なり（拙稿①）、❶は現存の『平家』に登場しない。この脇書は上杉本が独自に他史料より補つたと見るよりも、上杉本及び板本『源平系図』を遡る系図に付されてゐたもので、一部上杉本に古態が残る可能性があるのではないか。[50]

無論、両系図の関係について全体的に見る必要がある。板本『源平系図』の構成は、①桓武皇子、②堂上平氏（高棟王より親信までの単系）、③良将流（将門兄弟）、④正盛流、⑤坂東平氏部として、i忠通流（三浦・和田・岡崎）、ii頼尊流（土肥）、iii忠頼流（ア将常流〔畠山・小山田〕、イ忠常流〔千葉・上総介〕）⑥北条（維将より高時まで単系）より成る。上杉本に見えないのは　で平城・嵯峨・淳和、③で将門の兄弟達、④の光盛子（長盛・教性）、⑤iの三浦氏一族である。その他は総じて上杉本に比して簡略である。これが依拠した系図の省略である事は、その宗盛子能宗の脇書「阿波守」から明らかである。

〈系図十二〉（三系図とも○）

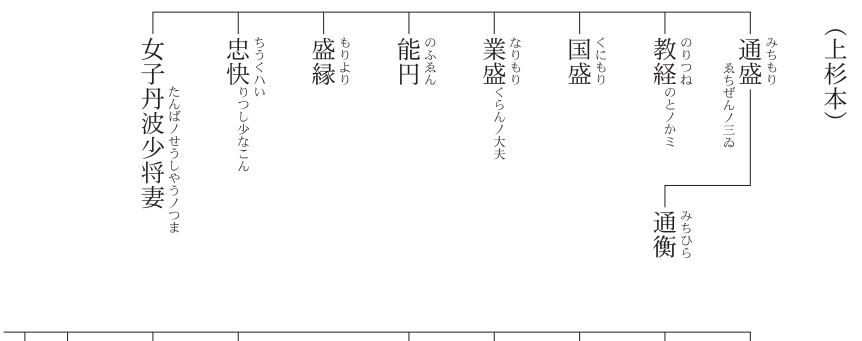
（板本『源平系図』）　（上杉本）　『尊卑』

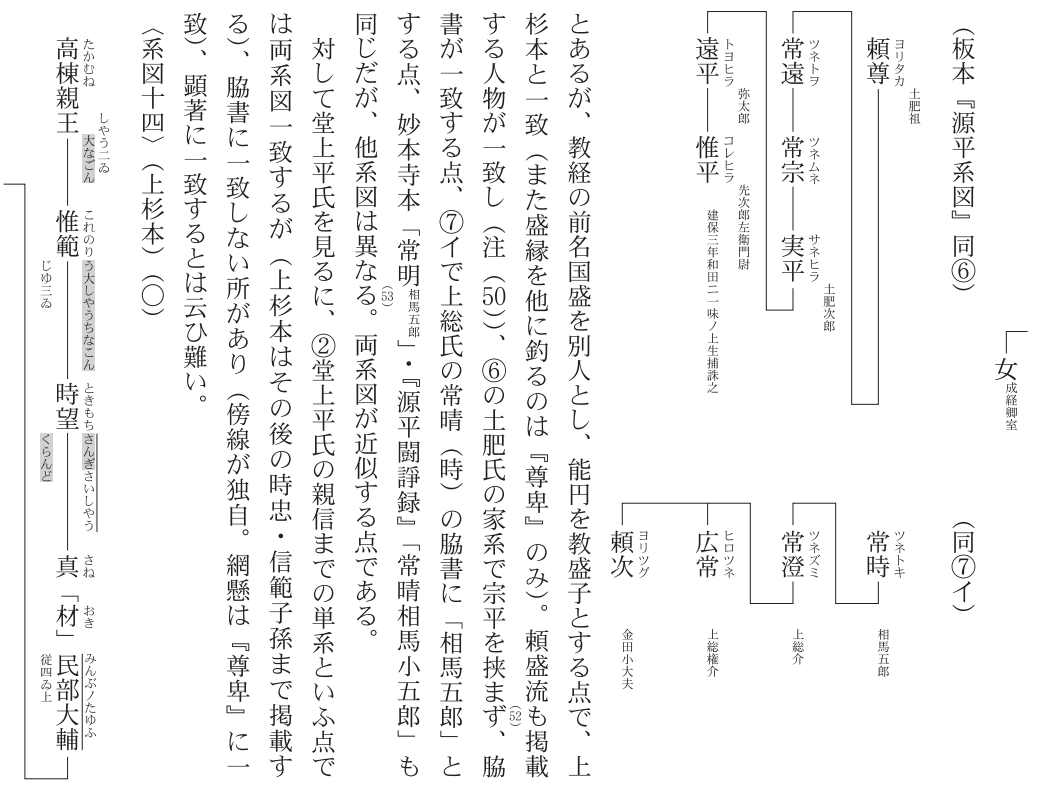


これを見れば本来宗親の脇書であるから、[51]板本『源平系図』は『尊卑』（・『古系図集』）の如く、正しい位置に置く系図より、派生したと考へられるのである。同時に板本『源平系図』が直接上杉本に拠つてゐない事も分かるが、他系図に見えず両系図が一致する点は、④の教盛子で、

〈系図十三〉（四系図とも○）

（上杉本）　（板本『源平系図』④）

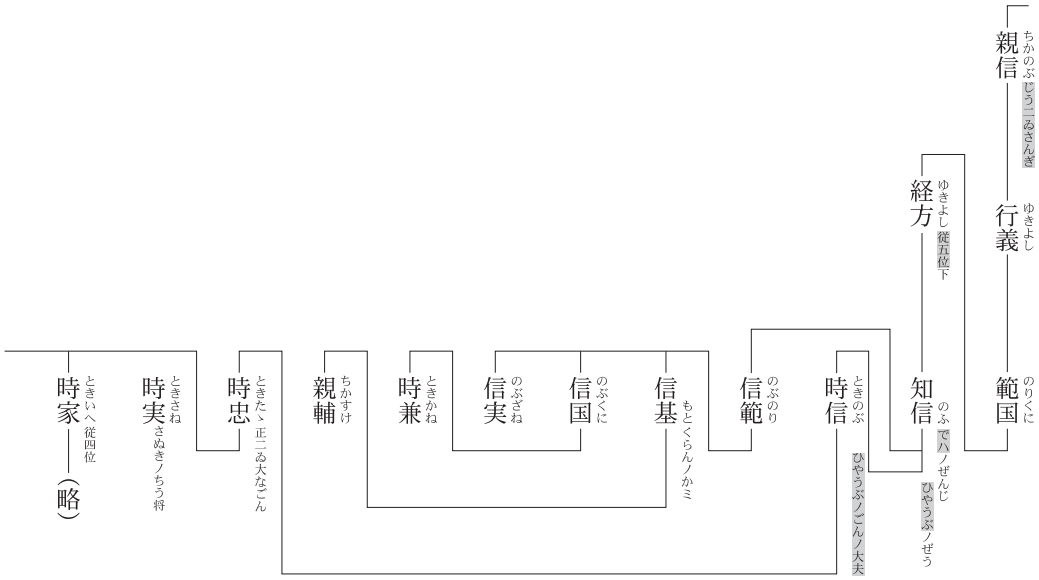




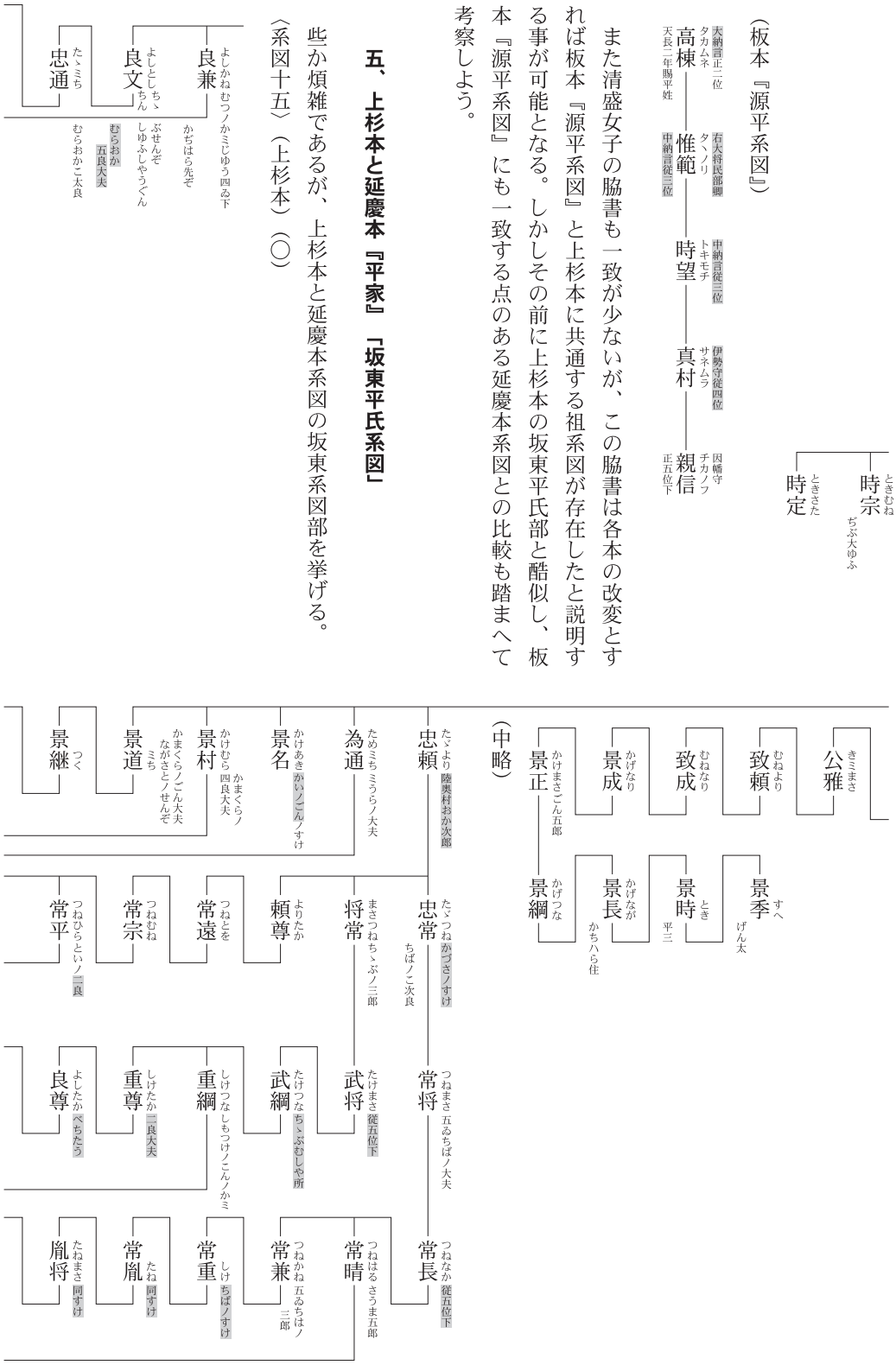
とあるが、教経の前名国盛を別人とし、能円を教盛子とする点で、上杉本と一致（また盛縁を他に釣るのは『尊卑』のみ）。頼盛流も掲載する人物が一致し（注（50））、⑥の土肥氏の家系で宗平を挟まず、[52] 脇書が一致する点、⑦イで上総氏の常晴（時）の脇書に「相馬五郎」とする点、妙本寺本「常明 相馬五郎」・『源平闘諍録』「常晴相馬小五郎」も同じだが、他系図は異なる。[53] 両系図が近似する点である。

対して堂上平氏を見るに、②堂上平氏の親信までの単系といふ点では両系図一致するが（上杉本はその後の時忠・信範子孫まで掲載する）、脇書に一致しない所があり（傍線が独自。網懸は『尊卑』に一致）、顕著に一致するとは云ひ難い。

〈系図十四〉（上杉本）（〇）



（板本『源平系図』）

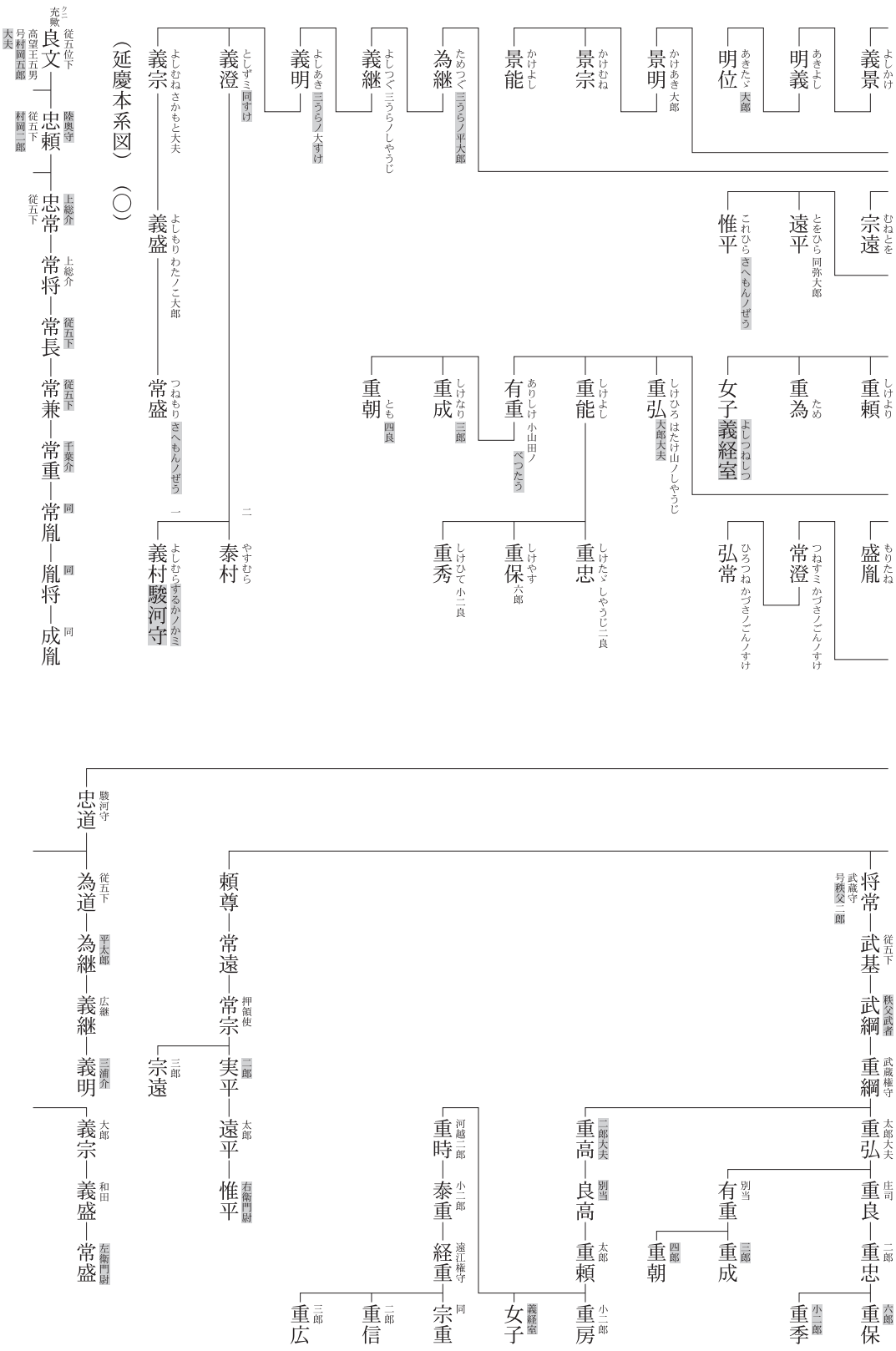


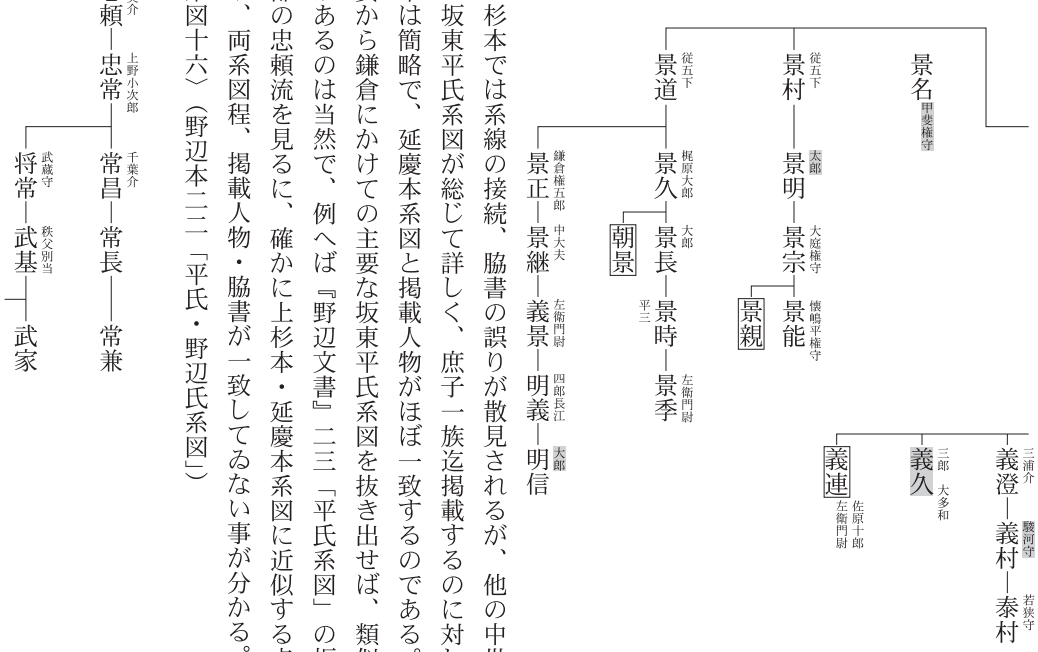
また清盛女子の脇書も一致が少ないが、この脇書は各本の改変とすれば板本『源平系図』と上杉本に共通する祖系図が存在したと説明する事が可能となる。しかしその前に上杉本の坂東平氏部と酷似し、板本『源平系図』にも一致する点のある延慶本系図との比較も踏まへて考察しよう。

五、上杉本と延慶本『平家』「坂東平氏系図」

些か煩雑であるが、上杉本と延慶本系図の坂東系図部を挙げる。

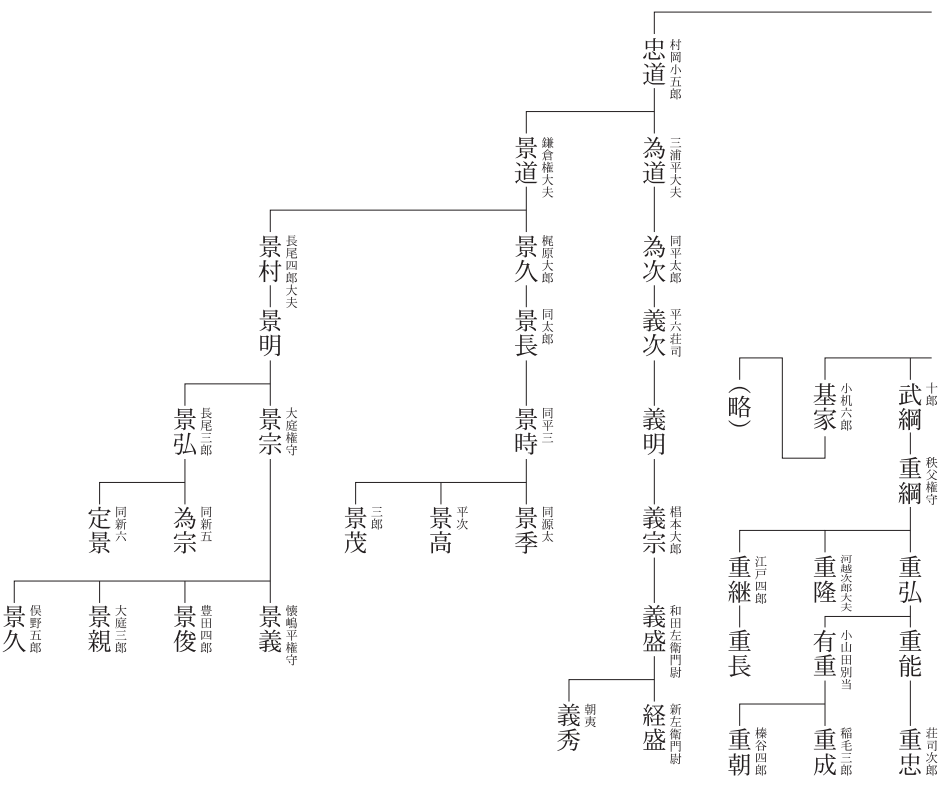
〈系図十五〉（上杉本）（〇）


（延慶本系図）（〇）
義景
明義
明位
景明
景宗
景能
為継
義継
義明
義澄
義宗
義盛
常盛
義村駿河守
泰村
宗遠
遠平
惟平
重頼
重為
女子義経室
重弘
重能
有重
重成
重朝
重忠
重保
重秀
盛胤
常澄
弘常
良文
忠頼
忠常
常将
常長
常兼
常重
常胤
胤将
成胤
忠道
為道
為継
義継
義明
義宗
義盛
常盛
頼尊
常遠
常宗
実平
遠平
惟平
宗遠
将常
武基
武綱
重綱
重弘
重良
重忠
重保
重季
有重
重成
重朝
重高
良高
重頼
重房
女子
重時
泰重
経重
宗重
重信
重広



上杉本では系線の接続、脇書の誤りが散見されるが、他の中世系図中の坂東平氏系図が総じて詳しく、庶子一族迄掲載するのに対し、上杉本は簡略で、延慶本系図と掲載人物がほぼ一致するのである。無論平安から鎌倉にかけての主要な坂東平氏系図を抜き出せば、類似する点があるのは当然で、例へば『野辺文書』二三「平氏系図」の坂東平氏部の忠頼流を見るに、確かに上杉本・延慶本系図に近似する点があるが、両系図程、掲載人物・脇書が一致してゐない事が分かる。

〈系図十六〉（野辺本二二「平氏・野辺氏系図」）



特に義経室の河越重頼女子[54]を釣る点で一致するのは、管見では上杉本と延慶本系図及び『諸家系図纂』十四下所収浅羽本「畠山系図[55]」で、

長江氏で明義―明信のみを釣るのは、後掲の指宿本を除いてこの二本である。[56] 上杉本が持たないのは、河越重時流、三浦氏の義久・義連兄弟、大庭景親、梶原朝景で、延慶本系図にないのが常晴流である。両系図の大きな違ひは上杉本が梶原氏を良兼流とする点で、目下、他系図に見当たらない。[57]

次に板本『源平系図』を見るに、良文流の忠通子に梶原祖の景通を位置付け、景名はないが延慶本系図に一致した。

〈系図十七〉（板本『源平系図』）（〇）

- 為通（タメミチ 三浦平大夫）
- 景村（カゲムラ 鎌倉四郎 大夫）
- 景通（カゲミチ 鎌倉権大夫 梶原）
- 景政（カゲマサ 鎌倉権五郎 長屋）

諸系図間で特徴的に相違が大きい箇所が正にこの三浦・梶原・大庭・長江の先祖の関係で、両系図に比較的近いのが上杉本であるが、他本を見るに（脇書は略）、

〈系図十八〉

（入来院本）

- 忠通―景名―景村（大庭）
  - 景道―景久（梶原）
  - 景正（長江）

（妙本寺本）

- 忠道―景道―景久（梶原）
  - 景宗（大庭）
  - 景政（長江）

『源平闘諍録』

- 忠道―景道―景村
  - 景将―景長―景時

（系図纂本三浦系図）

- 忠通―（章名）―景通（梶原）
  - 景村（大庭・長尾）
  - 景成―景正（長江）

（小田部本三浦系図）[58]

- 忠通―為通（三浦）
  - 景通（梶原）
  - 景正（長江）

（野辺文書本二二「平氏・野辺氏系図」）

- 忠通―景道―景久（梶原）
  - 景村（大庭・長尾）

（『中条文書』「三浦和田氏一族惣系図」）

- 忠道―為通―為次
  - 景名―景村（梶原長尾）
  - 景政（長江）

（『丹後松田系図』）[59]

- 忠通―為通（三浦）
  - 景通（鎌倉）

（『諸家大系図』四・『武家大系図』）

- 忠通―為通（三浦）
  - 景成（鎌倉）
  - 景通（梶原）
  - 景村（大庭・長野）

と諸本区々である。また延慶本系図も土井実平の父に宗平を挟まない。これからすると、上杉本の梶原流は独自の改変と解して、坂東平氏系図部に於いては三系図が近似し、共通祖系図が存すると見て良いと判断するのである。

一方上杉本は時政以降の泰時流と時房流を持つが、比較可能な時政までの系譜で、板本『源平系図』と一致しない。延慶本系図では、

〈系図十九〉

（板本『源平系図』）

一 北条祖 維将（従五位下）――直方――維方――時方（北条四郎）――時家（北条四郎）――時政（遠江守）

（延慶本系図）（○）

上総介 維時（従四下）――直方（従五上）――維方（従五上）――時方（和田四郎）――時家（号北条四郎大夫）――時政（北条四郎 遠江守）（使）

と、維将と維時の相違及び脇書に一致しない所があるが、時政迄の系譜は一致する。[60]

また正盛流系図では、国正流を載せる点で三系図は共通するが、必ずしも延慶本系図と両系図の間で特徴的に近似する点は見出し難い。

（三系図記事対照表）

	上杉本	延慶本系図	板本『源平系図』
堂上平氏	○	×	○
北条氏（時政迄）	○	●	●
国正流	●	●	●
時盛子	●	×	●
教盛流	●	○	●
頼盛流	●	○	●
明信―明義	●	●	×

（記事のある場合は○、無い場合は×、系図間で記事が一致、または特徴的に近い場合は●とした）

以上からすると、正盛流は上杉本と板本『源平系図』に共通点があり、坂東平氏部は上杉本と延慶本系図及び板本『源平系図』が、共通する祖系図を有する可能性があると云へるが、三系図の間で、1堂上平氏、2正盛流系図、3北条氏、4坂東平氏部より成る祖系図を想定するのは、現段階で困難である。上杉本で想定した様に、複数系図の混淆は想定出来るし、拙稿⑦で延慶本系図の正盛流と近似するとした野辺本二〇「平氏系図」では、正盛流の後に置かれる北条系図が、改めて桓武天皇より起筆され、比較可能な時政に至る北条歴代では延慶本系図と一致しない。これは各系図が個別に成立、[61]流布してゐたもので、延慶本系図に於いても、別系図が取り合はされた可能性を想定出来るからである。故に現在の所、族人・一族を網羅する志向のある広本的系図と異なり簡略で、歴史的に著名重要な族人・家系より成り、近似する所のある此等の系図を、略本的平家系図群と纏める事に留めるものである。延慶本系図の奥書に「両家肝要書出之、自余略之」とあるが、その背後に存在した系図[62]とは、広本的な系図よりではなく、既に存在した略本的平家系図からの抜書であつたと考へる事になる。

六、指宿本『平氏系図』の国正脇書

上杉本・延慶本系図・板本『源平系図』・妙本寺本イには正盛流の、忠正の子として国正親子を釣つてゐた。この国正親子について、『保元物語』には登場せず、記録間の食ひ違ひがあるが、保元の乱に院方として処罰を受けたとされ、正盛の一族ではないかと推定した（拙稿⑦）。その時、延慶本系図の国正と正方の脇書の「逃脱」は、専ら逃

亡の意であるとした。平安鎌倉時代の用例は枚挙に暇無く、[63]

ア、国解云、切首者十二人、降人・逃脱者、有其数也（『中右記』天仁元年正月二十三日条）

イ、凡老少交山野、緇素企逃脱之類、不可称計（『高野山文書又続宝簡集』百十一「高野山住僧解案」、承安四年十二月）

ウ、日円一旦雖令領知、既逃脱寺内、為放埒非人（『進美寺文書』「某袖判補任状」、正安元年七月）

エ、彼百姓等逃脱之後、令不作之刻（『朽木文書』「関東下知状」、嘉元三年閏十二月）

オ、此卿去文和丶年、逃脱参南方に了（『後愚昧記』貞治二年閏正月二十五日条）

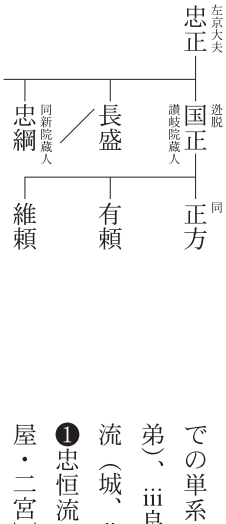
から明らかであるが、国正は斬首されたとの記事があり、[64]その真偽は不明であつた。

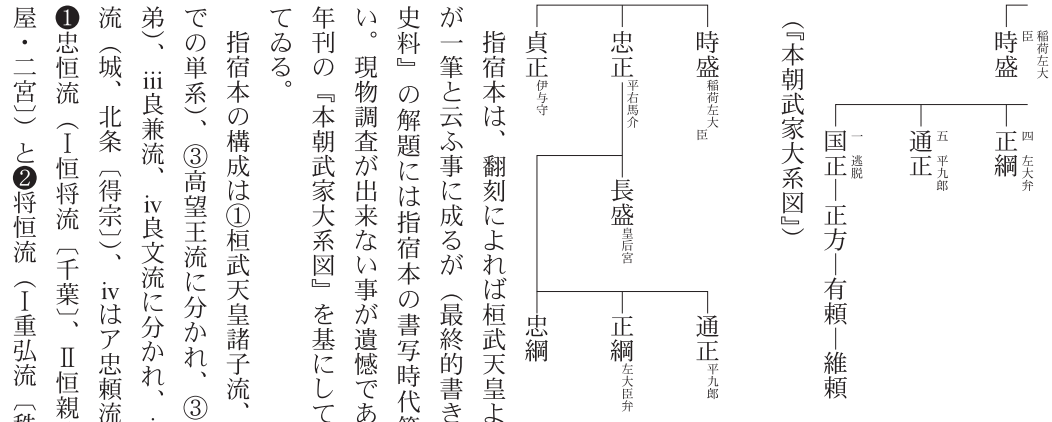
延慶本系図と近似する野辺本二〇「平氏系図」は前欠の断簡で、国正流自体確認出来ないのだが、指宿本が国正流を持ち、国正に延慶本と同じ脇書がある事が注目される。

〈系図二十〉（四系図とも○）

（指宿本）

（延慶本系図）





（『諸家大系図』四）

（『本朝武家大系図』）

指宿本は、翻刻によれば桓武天皇より室町初期の指宿近江守忠合迄が一筆と云ふ事に成るが（最終的書き継ぎは明治になる）、『鹿児島県史料』の解題には指宿本の書写時代等の成立について何ら記載がない。現物調査が出来ない事が遺憾であるが、筆者は現在の所、承応二年刊の『本朝武家大系図』を基にしてをり、近世以降の成立と推定してゐる。

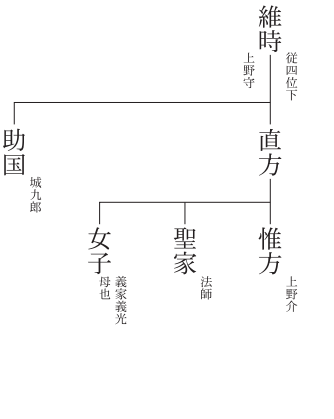
指宿本の構成は①桓武天皇諸子流、②堂上平氏（高棟王より行義までの単系）、③高望王流に分かれ、③はⅰ良望流、ⅱ良将流（将門兄弟）、ⅲ良兼流、ⅳ良文流に分かれ、ⅰはア維衡流（正盛流）、イ維将流（城、北条〔得宗〕）、ⅳはア忠頼流、イ忠道流に分かれ、そのアは❶忠恒流（Ⅰ恒将流〔千葉〕、Ⅱ恒親流、Ⅲ頼尊流〔中村・土肥・土屋・二宮〕）と❷将恒流（Ⅰ重弘流〔秩父・小机・畠山・小山田〕、Ⅱ

重隆流〔河越〕、Ⅲ重継流〔江戸〕）に分かれ、イはａ為道流（三浦一族）、ｂ景通流（梶原）、ｃ景村流（大庭・長尾）、ｄ景成流（長江）、ｅ輔孝流（鎮西平氏）より成り、最後の鎮西平氏流以外が比較の対照となる。

指宿本及び『本朝武家大系図』に近い系図として、他に『諸家系図纂』十一上「平氏系図」十一上と[65]『諸家大系図』四があり、[66]この五系図間で正盛流の頼盛流が一致したのは、指宿本と『本朝武家大系図』であった。また忠盛女子「判官代親路室」傍線は、「親政」とあるべきで、[67]共に誤るのも指宿本と『本朝武家大系図』である。次の、

〈系図二十一〉

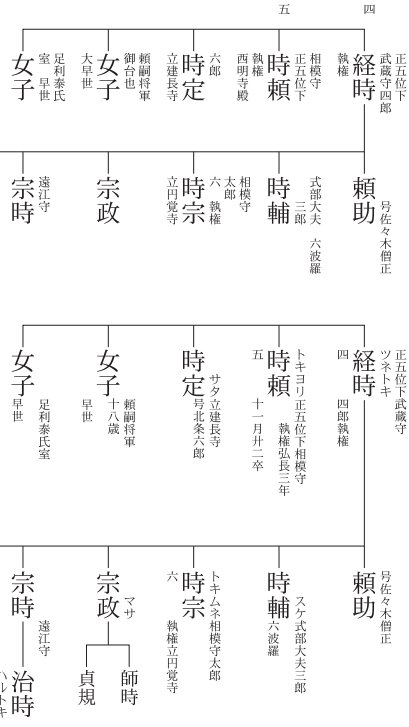
（指宿本）（○）　　『本朝武家大系図』



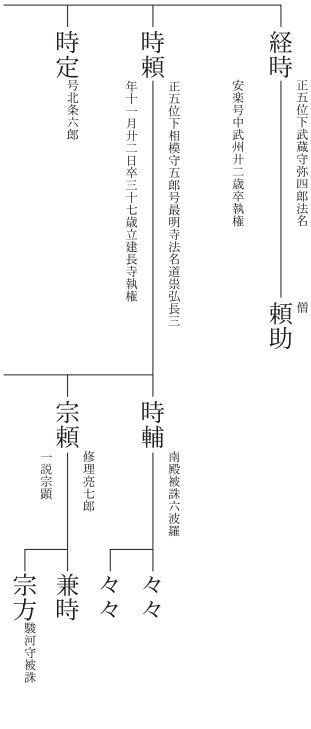
と、城氏を直方子と時代錯誤する点、聖家なる人物を釣る点でも両系図が一致するからである。更に両系図の関係を見るに、

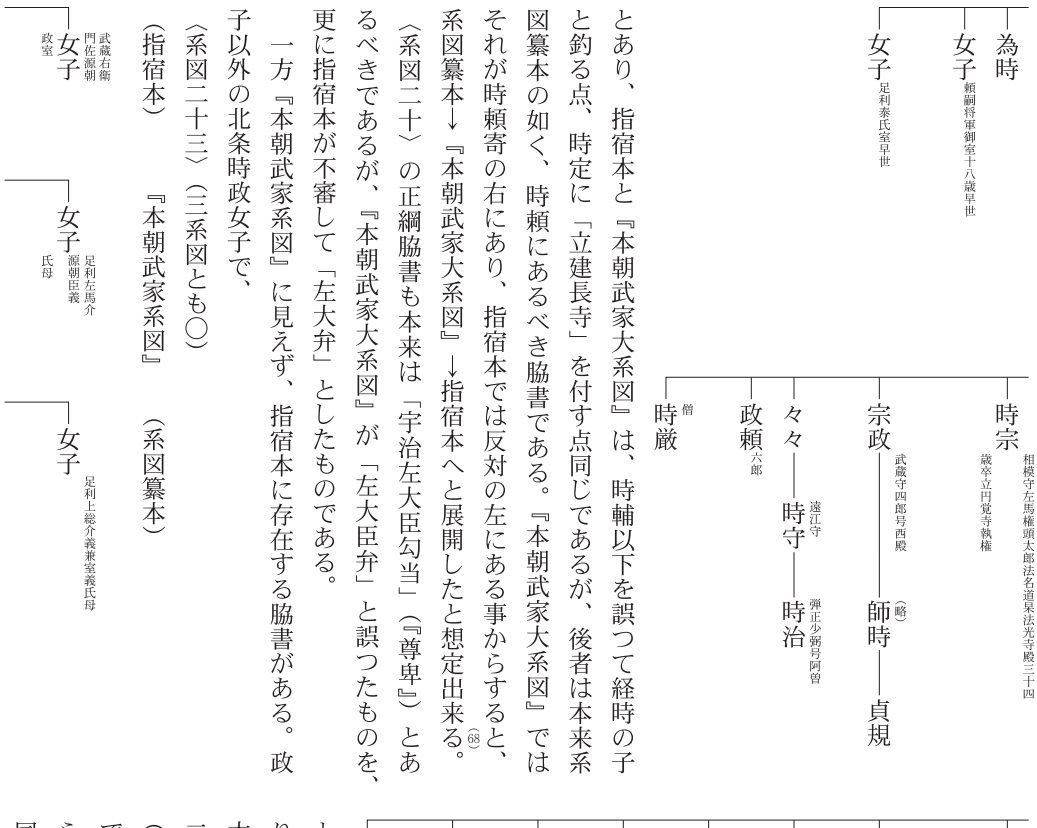
〈系図二十二〉

（指宿本）（○）　　『本朝武家大系図』（○）



（系図纂本）





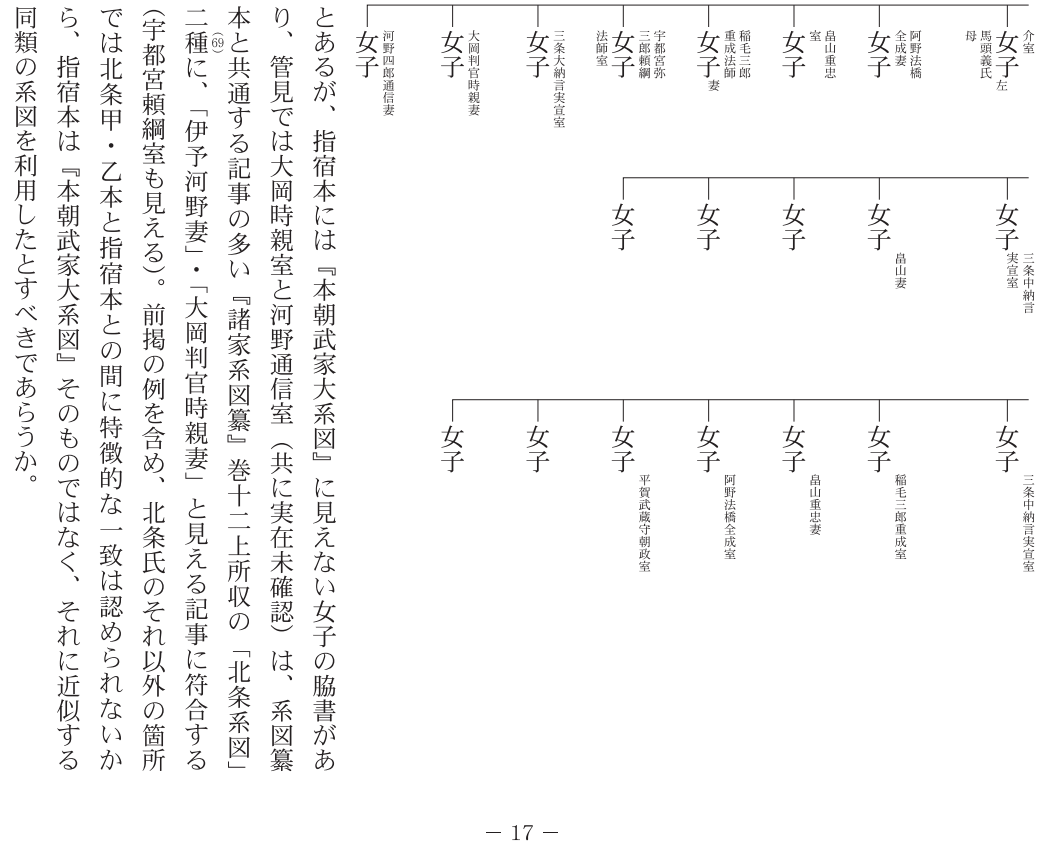
とあり、指宿本と『本朝武家大系図』は、時輔以下を誤つて経時の子と釣る点、時定に「立建長寺」を付す点同じであるが、後者は本来系図纂本の如く、時頼にあるべき脇書である。『本朝武家大系図』ではそれが時頼寄の右にあり、指宿本では反対の左にある事からすると、系図纂本→『本朝武家大系図』→指宿本へと展開したと想定出来る。[68]

〈系図二十〉の正綱脇書も本来は「宇治左大臣勾当」（『尊卑』）とあるべきであるが、『本朝武家大系図』が「左大臣弁」と誤つたものを、更に指宿本が不審して「左大弁」としたものである。

一方『本朝武家系図』に見えず、指宿本に存在する脇書がある。政子以外の北条時政女子で、

〈系図二十三〉（三系図とも○）

（指宿本）　『本朝武家系図』　（系図纂本）



とあるが、指宿本には『本朝武家大系図』に見えない女子の脇書があり、管見では大岡時親室と河野通信室（共に実在未確認）は、系図纂本と共通する記事の多い『諸家系図纂』巻十二上所収の「北条系図」[69]二種に、「伊予河野妻」・「大岡判官時親妻」と見える記事に符合する（宇都宮頼綱室も見える）。前掲の例を含め、北条氏のそれ以外の箇所では北条甲・乙本と指宿本との間に特徴的な一致は認められないから、指宿本は『本朝武家大系図』そのものではなく、それに近似する同類の系図を利用したとすべきであらうか。

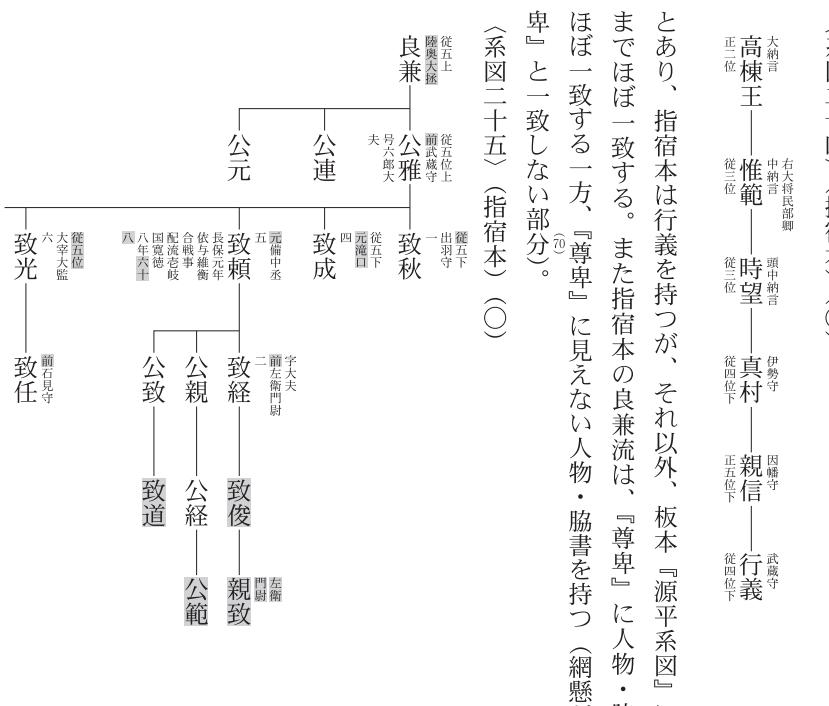
しかし指宿本のイ表記に見られる様に（後掲〈系図二十六・二十七・二十九・三十一〉）、指宿本が複数系図を利用してゐる事からすると、指宿本が別に他系図を参照して補なつたと目下、考へるもので、正に入来院本の時政女子が一致する。又指宿本の堂上平氏流は、

〈系図二十四〉（指宿本）（○）

大納言 正三位 高棟王 ― 右大将民部卿 中納言 惟範（従三位） ― 頭中納言 時望（従三位） ― 伊勢守 真村（従四位下） ― 因幡守 親信（正五位下） ― 武蔵守 行義（従四位下）

とあり、指宿本は行義を持つが、それ以外、板本『源平系図』に脇書までほぼ一致する。また指宿本の良兼流は、『尊卑』に人物・脇書がほぼ一致する一方、『尊卑』に見えない人物・脇書を持つ（網懸が『尊卑』と一致しない部分）。[70]

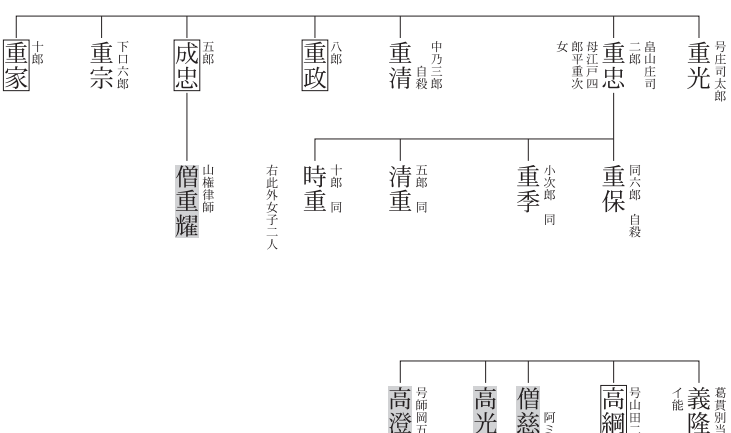
〈系図二十五〉（指宿本）（○）



更に指宿本のx畠山重能子・y秩父重隆子を見るに、

〈系図二十六〉（指宿本）（○）

（x）　（y）



とあるが、網懸の人物は目下、『吾妻鏡』及び諸系図[71]に未確認である。しかし囲みの人物は、薩摩の本田氏に伝来した系図[72]に（摘記）、

〈系図二十七〉（「本田系譜」）

- 重義（イ能（朱））　号畠山庄司
  - 重光　畠山庄司太郎
    - （略）
  - 重忠　畠山庄司次郎
  - 母江戸四郎藤重　次女
  - 重清　中野三郎（スリ消あり）
  - 重政　八郎
  - 成忠　五郎
  - 重家　右衛門尉

とあり、同じ薩摩国人の千竈氏に伝来する「平氏系図」[73]にも見えた。

〈系図二十八〉（千竈本）

- 武基　武家
  - 家綱
  - 武将
  - 武綱
    - 重綱
      - 重廉
        - 重義
          - 重光
          - 重忠
          - 重清
          - 成忠
          - 重宗
          - 重家
        - 有重
          - 重久
          - 重忠
          - 重成
    - 基綱
  - 重隆
    - 義隆
      - 重頼

また『本朝武家系図』に一致しなかつた人物・脇書が、「本田系譜」と千竈本に見える。一例を挙げれば、

〈系図二十九〉

（指宿本）（〇）

- 重遠
  - 高綱
    - 家重
      - 時家
        - （千竈氏）

（千竈本）（〇）

- 忠恒（前上総介　武蔵国押領使）
  - 恒将（上総介　従五位）
    - 常永（従五位下　四郎大夫）
      - 恒直（字恒生　次郎　承暦四年為兄常永被殺害）
      - 常家（上総介　太郎）
        - 常包（従五位下　千葉大夫）
          - 常重（従五　下　千葉介）
  - 恒親（三　安房押領使）
    - 恒益（一　字安房七郎）
    - 恒仲（二）
  - 僧頼尊（四　字山野辺　イ山辺　禅師）
    - （略）

- 忠恒
  - 恒将
    - 常永
      - 常家
      - 常包
      - 恒直
  - 恒親
    - 恒益
    - 恒仲
  - 僧頼尊

（「本田系譜」）

- 〇忠恒　前上総介　武蔵押領使
  - 恒将　五位字千葉太郎
    - 常永
    - 恒直
  - 〇恒親　安房押領使
    - 恒益　保元合戦之時、内〻所院蒙宣旨任
      - （略）

左衛門佐欤、信濃
前司
恒仲
安房七郎

頼尊（入り消）
□山辺禅師

であり、その他にも「本田系譜」（秩父氏の家綱）、千竈本（将門兄弟、家綱、貞盛弟の吉盛等）で、千竈本の方が指宿本との一致点が多い。

「本田系譜」では秩父氏の箇所に混乱があり、千竈本には脇書が殆どなく、掲載人物が指宿本より少ないが、指宿本にない人物があり（貞盛・繁盛子息）、薩摩平氏の系図部でも一致しない。指宿本と「本田系譜」に直接的関係は無いと思はれるが、同じ西遷御家人斑目氏の伝来の「渋谷氏系図」[74]に、

〈系図三十〉（斑目本「渋谷氏系図」）（○）

桓武天皇―葛原親王（一品式部卿）―高見王―高望王（始給平姓）―良文（村岡）―忠頼（陸奥□）―将常（号秩父別当大夫）―武基―
武総―重総（下野権守）―重広―重能（ヨシ）―重正（太郎）
重保（六郎）
重季（小二郎）
時重（七郎）
重忠（同二郎）
重清（父武時十歳自害 大蔵七郎）
円耀（重持 七良 貞重 弥二良）
大隅守
女子嶋津
惟宗妻
基家（小机）―（略）

と、別に指宿本（・中条本）に一致する人物があつた（囲み）。指宿本は薩摩伝来の未知の系図を参照してゐるものであらう。

一方、以上の対照からも明らかであるが、指宿本には依然、他系図に見えない記載がある。問題の国正の脇書「逃脱」は現在の所、延慶本系図にしか見えず、前述した通り、指宿本の坂東平氏の長江流の明義（長江四郎）―明信（太郎）は、延慶本系図及び上杉本に一致した。

〈系図三十一〉（指宿本）（○）

景成（鎌倉権五郎 イ正）――景経（中宮大夫）――義景（左衛門尉）――明義（長江四郎）――明信（太郎）

また景名の位置も延慶本系図及び上杉本に同じである。この正盛流と坂東平氏部での一致からすると、指宿本は端的に延慶本系図より増補した可能性が考慮される。一方で延慶本系図他では、正方以下が横線で釣られ兄弟であるが、指宿本ではこれを竪線で繋ぐ。先の『百姓縁起』所収系図にも部分的に同じ方法が採られるが、延慶本系図より増補する際、此処だけ縦線で兄弟関係を表示したと説明する事になるのが問題である。

指宿本が延慶本を参照した可能性は低いとしても、その系図の写しが流布した可能性もあらう。また全てを別々の系図よりの引用とする必然性も無いから、先の板本『源平系図』に近い堂上平氏部を含む略本平氏系図の一本よりの増補の可能性も浮上する。これは指宿本の成立研究と併せて後考を待つが、延慶本系図が中世系図の中で孤立してゐなかつた可能性がある。

注

（1）①「桓武平氏正盛流系図補輯（上）」・「同（下）」（『国語国文』六十四ノ十二・六十五ノ一、平成七年十二月・同八年一月）

②「桓武平氏正盛流系図補輯之落穂」（『米沢国語国文』二十五、平成八年十月）

③「小松の公達の最期」（『国語国文』六十七ノ一、平成八年十月）

④「池殿の末裔」（『国語国文』六十九ノ十、平成十二年十月）

⑤「桓武平氏正盛流系図補輯之彦栄」（菊池靖彦教授追悼記念論集刊行会編『人・ことば・文学』所収、平成十四年十月）

⑥『『平家物語』「土佐守宗実干死」覚書」（『米沢国語国文』三十二、平成十五年六月）

⑦「平家系図雑考」（『米沢史学』十九、平成十五年十月）

⑧「桓武平氏正盛流系図補輯之裏成」（『米沢史学』二十二、平成十八年六月）

（2）『久我家文書』二「八条院庁下文」（國學院大学の翻刻による）

（3）冷泉本『公卿補任』元久二年光盛条（冷泉家時雨亭叢書『豊後国風土記　公卿補任』の影印）。これは後掲上杉本の光盛番号に一致。

（4）『久我家文書』二八ノ（四）「円性（光盛）処分状案」

（5）『東寺王代記』永享四年条（続群書類従）・聖阿本『銘尽』（本間薫山氏「古伝書釈文　享禄比写　刀剣書（三）」〔『刀剣美術』二四八、昭和五十二年九月〕）。鈴木彰氏『平家物語の展開と中世社会』第三部第一編第三章「足利将軍家の重代の太刀」平成十八年二月）参照。

（6）東大史料編纂所の謄写本。同蔵写本『山吉家由緒書』も長盛を祖とする。猶、以下の系図を掲出の際、原本の系図の形態を残す場合、系図番号の下に○を付す。

（7）平氏系図は必要の無い限り、京都大学附属図書館菊亭文庫本（紙焼写真）により、『尊卑』と略する。その他の箇所は新訂増補国史大系により、その旨明記する。また広橋本（国立歴史民俗博物館の電子公開）、故実叢書本、西道智編『新板大系図』巻二十三（共に国文学研究資料館公開の電子資料）も参照した。

（8）『諸家系図纂』巻二十七上が同じ（内閣文庫の電子公開）

（9）同書の電子公開。同系写本として宮内庁諸陵部蔵『源氏諸流系図』（紙焼写真）・京都大学附属図書館平松文庫蔵『平松系図』一巻（2ヒ3）も参照。

（10）天正七年日恩写。『千葉県の歴史　資料編　中世三』の翻刻による。以下、妙本寺本と略。

（11）山口隼正氏「入来院家所蔵平氏系図について（上）」・「同（下）」〔『長崎大学教育学部社会科学論叢』六〇・六一、平成十四年三月・六月〕の翻刻による。以下、入来院本と略。

（12）『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　家わけ六』所収。入来院本に基づくか。

（13）乾坤二冊。東大史料編纂所の謄写本による。以下、正宗寺本と略し、断らない場合、乾冊所収。

（14）『都城市文化財調査報告書　第三〇集』の写真・翻刻による（此処では同書の番号と書名により野辺本何番とする。『宮崎県史　史料編　中世一』・『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　家分け六』にも翻刻がある）。また『志布志野辺文書』三一「野辺氏系図」がある（『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　家分け九』、以下、志布志野辺本とする）。

（15）汲古書院『延慶本平家物語』の影印による。以下延慶本系図とする。

（16）巻十二の最後に付される。日本古典文学会の複製による。拙稿⑦参照。また正盛流・坂東平氏流を欠くが、北条系図として野津本『北条系図』（田中稔氏「史料紹介　野津本『北条系図、大友系図』」〔『国立歴史民俗博物館研究報告』五、昭和六十年三月〕）、北条、坂東平氏流として山形大学図書館蔵『中条文書』所収の「桓武平氏諸流系図」（紙焼写真、猶文書名は『中条町史　資料編第一』に拠る）を参照した。以下、それぞれ野津本・中条本と略。

（17）京都大学附属図書館蔵本による。国会図書館・早稲田大学図書館蔵本が電子公開されてゐる。東北大学図書館蔵狩野文庫写本は版本の写し（徳川将軍家は家光・忠長まで）。

（18）国文学研究資料館公開の大和文華館蔵本の電子資料による。巻四所収系図は『尊卑』と大きく異なる（皆川完一氏「尊卑分脈」〔『国史大系書目解題』下所収〕、平成十三年十一月）。同系本に東大史料編纂所徳大寺本『源氏系図』（徳大寺四七・五一）が同じ。「平氏祢寝家系図」も同系だがほぼ清盛流のみ（『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺家分け一』）。京都大学附属図書館菊亭文庫蔵『系図略』（菊ケ五）一冊（紙焼写真による。以下、菊亭本と略）も近いが、〔〕が無い。新訂増補国史大系『尊卑分脈』所収の脇坂本「平氏略系」も同系か。以下、『諸家系図』四を掲出する。

（19）『指宿文書』所収「平姓指宿氏系図」二種（『鹿児島県史料　旧機雑録拾遺　家わけ十』所収三〇番と三九番の翻刻。此処では三〇番を指宿本として利用）。

（20）『本朝武家大系図』は国文学研究資料館蔵版本二冊（承応二年刊）。国会図書館には無刊記本がある（共に電子公開）。九州大学図書館細川文庫蔵『源平系図』写本一冊は『本朝武家大系図』の写し。為盛の左脇に「さ兵衛佐／じやうへんほうし」とある（紙焼写真）。

（21）尊覚法親王母が清季女（『明月記』安貞元年十二月一日条）であるから、佐尼も清季室。惟義は大内惟義と思はれるが、北酒出本『源氏系図』・『尊卑』等の中世系図には確認出来ない。

（22）『帝皇系図』の清季にも特に記事なし。

（23）『大日本史料』五之一、同日条所引。『歴代残闕日記』（臨川書店の影印）所収『家光卿記』も同。

（24）実清は『院号定部類記』所引『顕時卿記』応保元年十二月十六日条に八条院の「補別当」とある（東山御文庫本の紙焼写真）。清季は例へば『明月記』元久二年十二月三日条に院司とある。また『北院御室御日次記』寿永元年十二月十四日条の仁和寺観音院結縁灌頂の八条院行啓記事を見るに、頼盛親子共に実清親子が奉仕してゐる事が分かる。

扈従公卿

源大納言定房　按察中納言頼盛　源宰相中将通親　大弐実清

前駆殿上人

通資朝臣　保盛朝臣　隆信朝臣　盛実卿　宗頼朝臣　成家　為盛

雅行　長経（『守覚法親王の儀礼世界―仁和寺蔵紺表紙小双紙の研究基幹法会解題付録資料集　論考・索引篇』）

（25）『吉記』元暦元年四月八日条。

（26）『院号定部類記』所引『大禅記』・『中民記』久安五年八月三日

条、『台記別記』久安五年十月二日条。

（27）父の藤原親忠が美福門院の乳人（『台記』久安三年八月十七日条・『宇槐記抄』仁平三年五月二十一日条、史料大成による）。

（28）『砂巌』五「文書類并消息等雑々」の「藤原俊成男女交名」を見るに、定家の姉妹五名が八条院女房である（図書寮叢刊による）。

（29）『尊卑分脈』「長家卿孫」

（30）『明月記』正治元年四月十九日条。

（31）『明月記』寛喜二年七月二十八日条・天福元年三月九日条、国立歴史民俗博物館蔵広橋本『尊卑分脈別本』（拙稿「寒河江系『大江氏系図』の成立と史料的価値について（下）」（『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』四十二、平成二十七年三月）に当該箇所を翻刻）。

（32）近世初期写一軸。正宗寺本に近い北条氏系図以外は簡略で、堂上平氏・坂東平氏系図部はない。

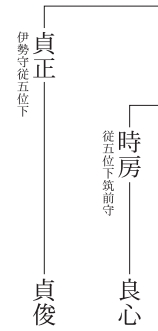
（33）豊前の長野氏は時盛を先祖とする。津田氏蔵『長野家系』では「稲荷左大臣」「従二位」とし、鈴木真年氏蔵『長野氏家系』（共に東大史料編纂所蔵謄写本）では「正盛二男」「稲荷左大臣家々司」「従二位」とし、共にその六男の修理大夫康盛を元祖とするが、該当人物が見たらず、官職も不当に高く不審である。これも系図を利用した仮冒であらう。

（34）忠貞への改名は『兵範記』保元元年七月二十七日条・二十八日条参照。次の上杉本が誤りながらも忠貞を持つ事に注意。

（35）「蔵人右衛門尉平時盛〔廷尉三臈〕」（『山槐記』永暦元年十二月十五日条）

（36）彰考館蔵『佐野本系図』八「桓武平氏系図綱要下」（東大史料編纂所蔵謄写本）には、

〈系図三十二〉（『佐野本系図』）（○）



とあり、貞正の脇書は正しいが、時房脇書・良心は『吾妻鏡』の記事を利用してゐる。これが板本『源平系図』を遡るか不明である。

（37）山田忠雄氏「法明童子」（『山田忠雄追憶史学・語学論集』所収、昭和三十八年）・迫野虔徳氏『方言史と国語史』「古文書にみた中世末期越後地方の音韻」（平成二十四年十二月）に、その時期、方言性について論がある。特に迫野氏論に拠れば、上杉本が中世末期上杉氏周辺で書写されたと推定して可になる。

（38）時家の死亡記事が『吾妻鏡』に載るが、以降、男系子孫が見えない。時家の女子については、永正本『大江系図』に見える（『寒河江市史　大江氏ならびに関係史料』所収）。

（39）『諸家大系図』四は祐円を忠盛子とする。祐円については拙稿「経誦房阿闍梨覚書」（『米沢国語国文』三十九、平成二十二年十二月）参照のこと。

（40）勉誠社影印による。本門寺本は「政慶」（国会図書館蔵写本の電子公開）、大永八年本は「政度」（雄松堂のマイクロによる）とする。

（41）訓読本は「良視」とする。新編日本古典文学全集『曾我物語』（日本大学本）参照。

（42）拙稿「安日説話の展開―真名本『曾我物語』揺蕩―」（『国語国文』七十五ノ十二、平成十八年十二月、その後、『百姓縁起』写本として、東京大学史料編纂所徳大寺本の近世写『日本八十姓并四家系図』一冊を参照した。

（43）上杉本と『諸家大系図』四で一致したのが破線の政衡の官職「宮内丞」であるが、正宗寺本や国立歴史民俗博物館蔵高松宮本『源平系図』（但し「宮内卿」）にも見える（電子公開）。

（44）能宗に副将軍と脇書をするのは板本『平家系図』・正宗寺本・妙本寺本・野辺本一五「一条兼良証判野辺盛仁一流系図」・同二二「平氏・野辺氏系図」・同二三「野辺盛仁一流系図写」。

（45）妙本寺本は「左京大夫」。正宗寺本・『諸家大系図』四は正盛に「右京（権）大夫」（徳大寺本・菊亭本・「平氏祢寝家系図」括弧部なし）。『尊卑』では忠盛の脇書とする。

（46）『吉記』養和元年三月二十六日条。

（47）『警固中節会部類記』所収『山槐記』治承五年正月五日条。

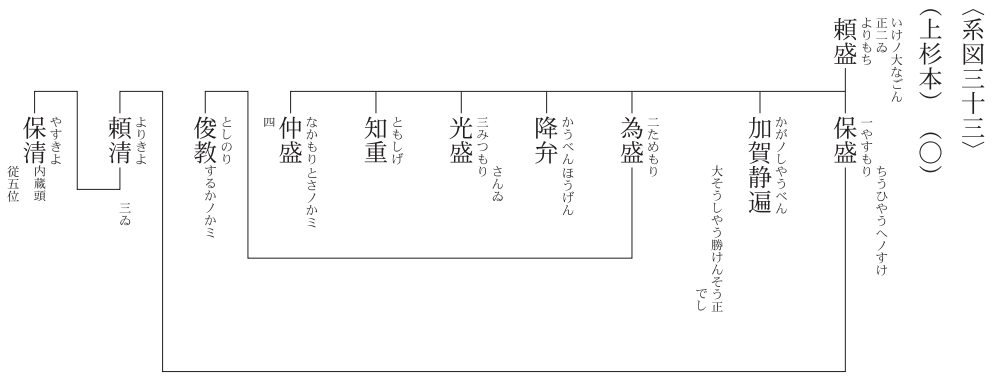
（48）『玉葉』治承四年正月二十八日条。

（49）その実在については拙稿「以仁王近臣三題」（『米沢国語国文』三十二、平成十五年六月）の注（25）参照

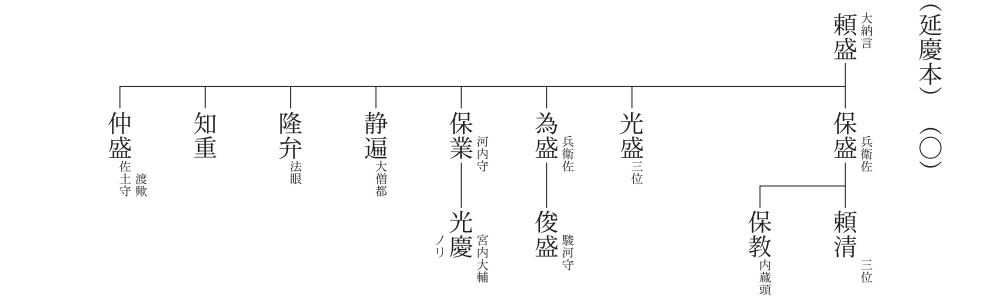
（50）また板本『源平系図』他の記事の成立を示唆する所が上杉本にある。

〈系図三十三〉

（上杉本）（○）



（延慶本）（○）



とあり、上杉本は延慶本系図・『尊卑脱漏』・及び板本『源平系図』同様、頼盛子として「隆弁」を釣るが、実在未確認人物であつた。『興福寺別当三綱系図』（東大史料編纂所蔵謄写本。二条寺主憲乗筆の本奥書あり）では、隆弁に「興福寺法眼」とするが、重盛子の仁和寺僧重遍（拙稿③）にも、興福寺僧の脇書のある所を見るに、従ふ必要はないだらう。依然「法眼」の由来は不明であるが、上杉本の「降弁」からすると、「降」と「浄」の草字が似るから、これは本来「浄弁」で、今一人の法師子の「静遍」（梵舜本『沙石集』巻六「嵯峨説法事」に「浄遍僧都」と表記される〔日本古典文学大系〕。内閣文庫本同〔土屋友里子氏『内閣文庫蔵『沙石集』翻刻と研究』〕。元応本は「静遍」〔『元応本沙石集』〕。『吾妻鏡』建保元年三月二十三日条も「浄遍」）と同一人物と推定出来る。これを別人と見て増補したものであらう。

（51）『玉葉』・『山槐記』治承三年十一月十九日条。延慶本『平家』四「平家一類百八十余人解官セラル、事」。宗親を持つ系図として、他に延慶本系図・正宗寺本・野辺本一五「一条兼良証判野辺盛仁一流系図」・二〇「平氏系図」・二二「平氏・野辺氏系図」・二三「野辺盛仁一流系図写」・志布志野辺本があるが、阿波守の脇書がない）

（52）中条本・『小早川家系図』（大日本古文書『小早川家文書之二』同。入来院本・妙本寺・正宗寺本・『源平闘諍録』・指宿本・『諸家大系図』四は挟む。

（53）『尊卑』「常時上総介」・入来院本「常晴上総介」・中条本「常晴」とする。『諸家大系図』四は、常長子に「常晴相馬五郎」を釣り、上総氏の先祖とはしない。

（54）『吾妻鏡』元暦元年九月十四日条に確認出来る。

（55）但し他の脇書を見るに『吾妻鏡』を参照してゐるとしても可。

（56）正宗寺本は長江氏系図が詳しいが「明義（小四郎）―明信（小太郎）」として仮名が一致しない。

（57）『古系図集』・『尊卑』の良茂流の梶原系図と致成以降が一部一致する。

（58）東大史料編纂所蔵謄写本による。

（59）榎原雅治氏「新出「丹後松田系図」および松田氏の検討」（『東京大学史料編纂所研究紀要』四、平成六年三月）の翻刻による。

（60）『本朝武家大系図』・『諸家大系図』四は維将―維時として、以下の歴代が同じ。脇書は一致しない。

（61）高橋秀樹氏は、河越氏の系譜が詳しい事から、延慶本系図が同氏周辺で作成されたとする（「三浦氏系図にみる家の創造神話」〔『中世武家系図の史料論』上所収、平成十九年十月〕）

（62）横井孝氏「延慶本平家物語附載系図について」（『季刊ぐんしょ』再刊八、平成二年四月）

（63）アは史料大成、イは『平安遺文』（二八四二）、ウ・エは『鎌倉遺文』（二〇一八〇・二二四三三）、オは大日本古記録による。

（64）『帝王編年記』保元元年八月二十九日条。

（65）『続群書類従』巻百三十八所収の諸系図が、配列が異なるがこれに同じ。

（66）この近世版行の略本系の系図類の成立・関係については、別に考察したい。

（67）『吾妻鏡』治承四年九月十四日・同十七日条・『源平闘諍録』巻五「加曽利冠者与千田判官代親正合戦事」・諸家系図纂『吉見系図』・

『諸家大系図』。

（68）但し『本朝武家大系図』が直接、系図纂本に拠つたとは見做されない。（66）の予定論文で詳述したい。

（69）前者を北条甲本、後者の浅羽氏蔵本を北条乙本とする。

（70）『丹後松田系図』とも一致しない。

（71）その他に史料纂集『熊野那智大社文書　第三　米良文書』九九八「諸家系図類」ホ「畠山氏系図」を参照。六郎重保・小次郎重秀・長野三郎重清・六郎重宗は『吾妻鏡』元久二年六月二十二日条に見える。重光は『本朝武家大系図』にも釣る。

（72）『本田家記文書及系譜』一「内閣修史局依頼書」、以下、「本田系譜」と略（『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　家分け十』所収）。

（73）『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺家わけ六』所収『千竈文書』二四、以下、千竈本と略。

（74）『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺家わけ六』所収『斑目文書』一八。